

比ミンドロ島・樹上家屋で暮らす

# 幻の少数民族「ルワン族」 との接触を求めて...

## 横浜市立大 探検部の4人

希望に燃え  
25日出発

フィリピン中部のミンドロ島で樹上家屋で暮らす、幻の少数民族「ルワン族」との接触を求めて、横浜市立大学（横浜市金沢区）探検部の4人が、二十五日、探検旅行に出発する。一行は「まだ存在すら確認されていない少数民族がどのように生活しているのか、ぜひこの目で確かめたい」と、希望に燃えながら、準備を進めている。

探検旅行に参加するのは、同部の佐藤史さん（20）ら4人。一行は飛行機でマニラに向かい、「ジープニー」と呼ばれる乗り合いのジープやフェリーボートを乗り継ぎ、ミンドロ島カランに到着。さらにそこからジープニーで、アグロパン川流域のヒリア・セルベサに行き、ルワン族がいるといわれる同川上流域に徒歩で向かう。

同部がルワン族の話を聞いたのは、一昨年の六月。交通の便が比較的良くなり、しかし文



地図を見ながらルート最終チェックをする部員の佐藤君ら（左から3人目）

書かれているほど。同部ではぜひルワン族と接触し、どんな家での様な生活をしているのか確かめたい」と、今回の探検に至った。

今回は初めて池田三津恵さん（20）と室賀美和さん（20）の女性部員二人が参加。池田さんらは「女性でなくては見られない部分、例えば現地の女性たちがどのような暮らし方をし、食料品はどんなものが多いのか、つぶさに見てみたい」と、意欲的。

ルワン族が住むといわれるアグロパン川上流域は、熱帯雨林気候で、雨期と乾期は、毎目スコールが降り、また、山岳地帯のため道も険しく、ほとんど草木の中を行進したり岩場を登って行くような状態。さらに少数民族は多民族に対する警戒心も強い。このため、今回の探検旅行が成功するかどうかは疑問。しかし、佐藤さんらは「たまたま失敗していても探検の過程の中で少数民族に対するどんな話が得られるか、それだけでも収穫」と、目を輝かせている。一行は、二十五日に成田から同日、四月八日に帰国する予定。

明の影響を受けず、独自の生活様式を守る少数民族が多い。ミンドロ島に着目、数回の探検旅行を行っていた時だった。当時、旅行に参加した同部員マニラ生まれの日本人から文獻によき、存在する

# 横浜市大探検部・比国ミンドロ島行報告

「幻の少数民族」といわれ、雨にぬれ、ルワン族との接触を求め、フィリピン中部のミンドロ島に探検旅行に三月出かけ、横浜市立大（横浜市金沢区）探検部の四人がこのほど帰国した。現地では異常な降



ブラボイの高床式住居と腰のかごを背負ったアラングン族の女性

…他の少数民族から様々な情報…

## アラングン族のビッグハウス 樹上家屋を発見、言語も採取

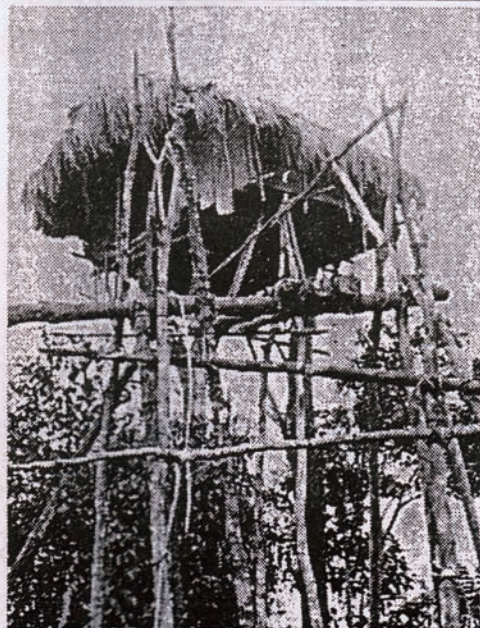
一行は同島を流れるアグロバン川流域のブラボイにペーラスを設置。乾期には異常な雨が降り続いたため十日間、同地で待機したが、降りやまなため徒歩で出発。しかし、ルワン族が居住しているという地区に向かう途中のブッティンパトッ地域にかけられていた橋が川のはらんで使用不能。このため日程を変更、同川支流のブラボイ川沿いに住むアラングン族で山岳地に住む集団との接触を求め同川上流に向かった。

ブラボイ付近に住むアラングン族はかなり文明が入りこんだ状態。そのために一行は「本来のアラングン族の姿を」と同川上流のアワリン、パノックへと向かい、アラングン族の集合住居ビッグハウスを発見した。ビッグハウスは七世帯が仕切りのない正方形の高床式住居に住み共同生活を営んでいたという。このビッグハウスは、アラングン族の本来の生活様式といわれ、ミンドロ島に何回か探検旅行に出かけた同部員たちの間でも「つまみ食いという住宅がある」と聞いていた程度で「この旅行の一番の収穫です」という。

このほかにもブラボイで待機中、異地に行かなくてはならないと言われていた樹上家屋を

同地域周辺で発見したり、地元の子守唄や言語を採取した。探検に加わった同部員の佐藤修史さん（30）は「集めてきた写真や資料を今までに確認されている文献などと照らしながら報告書をつくり、次回探検に生かしたい」と話している。

幻の少数民族「ルワン族」との接触ならなかったが



ブラボイ周辺で発見した樹上家屋